誌上行学講習会

高佐日煌上人

「次には人間心の餓鬼心であります。これは物欲心のことであります。物を欲しがる心。物を惜しむ心。それもただ何となく物を欲しがること。例えば、家を建てる時上棟式をやり餅を投げます。投げる方は喜びを餅にたくし、家がながもちするように願ってまくのですが、通りがかりの人がこれを見ると夢中になってこれをひろう。ひろってみたってどうということはないでしょうが、ただ何となく拾ってみたいという欲望をおこすのです。節分の豆まきの時などはもっとはっきりしています。カサを逆さに開いてそれに入れようとする。物欲心のあらわれであります。

又人に何かを依頼する場合、必ず一寸した菓子折か何かを持って行く。一体誰がそういう規則を決めたのか。それは誰がきめたのでもなく、人間の物欲心を満足する為に自然に人間が知った常識であります。受けた方もたしかに何かしらん気持がやはらぐ、話しもはずんで来る。「不思議なことですが現実の姿であります。広告マッチなどもそのよい例でしょう。普通の広告ですとすぐに捨ててしまいがちですが、マッチだとふと見てポケットに入れる。これは利用価値があるからであります。いたる所自分の店の名、商売を示したマッチが使われています。すべて物欲心の示すところでありましょう。

次の人間心の中の畜生心は愛憎心であります。これとても深い意味はない。しかし人間にはたえず働らいています。一寸したことで好きになったり嫌いになったり、「どうもあいつは虫が好かねえ」等という言葉をよく聞きます。口のきき方、顔つき、態度で好悪の感じをもつ。

「一目見たとき好きになったのよ」なんて歌があります。ずい分とそそっかしいやつがあったもんで、少し無責任すぎる。「一目見たとき好きになったのよ」は「二目見たとき嫌いになったのよ」ということになる。つき合ってみて人格をよく知って「好きになったのよ」というのがほんとであります。何等の根拠もなく好きになったり、嫌いになったりという心は、畜生心と見なければなりません。道徳も倫理性もない、くだらない心であります。

次は人間心の修羅心。「これは闘争心であります。争う心は何時でもかまくびをあげる用意をしております。満員電車の中で足を踏まれた。誰も踏みたくてふんだのではないのでしょうが、踏まれた方は、新らしい靴を大事にきれいにはいていたとなると「何をするんだ君は足を踏んずけて」とどなります。この時踏んだ方が「これは申しわけない大変混んでいるものですから、どうもすみません」とあやまれば、いいんでしょうが、応対が悪いととんでもないことになります「混んでるんだから仕方がねえだろ、俺だって踏まれてんだ」等と言うと「何をこの野郎!」となり喧嘩がはじまる。いつの時でもこの心が人間の底にあるというのが人間の斗争心であります。これは生活のあらゆる面に見られます。夫婦けんか、兄弟けんか等は一寸したところから始まります。私なぞも小学生の頃はけんかがめしよりも好きな一人だった。一日に一度はけんかをしないと夜ぐっすり眠れない程だった。体の大きなやつとやるときにはこの手で行こう。組み伏せられたらこうやろう等と真剣に考えたものであります。どうも人間おとなしそうにみえても案外けんか好きのようであります。

以下次号